月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１４１号　2021（令和３）年１月26日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

太田村立太田国民学校５年生。前から３列目右端が片岡稔惠さん。最後列右端が内藤博夫氏。左端が松浦好男校長。右端が４年生時担任の石川先生。（写真提供：内藤博夫氏）

「昭和っ子」８６年の歩み

作家の片岡稔惠さんは1934（昭和９）年のお生まれ。1944（昭和19）年８月、ご母堂のご実家のある稲敷郡太田村（現稲敷市太田）に学童疎開。その後、東京大空襲で被災されたご家族も避難。戦後も太田村に住み続け、中学校卒業後、就職し、土浦一高通信制課程で学ばれました。今回、ご自身の半生を綴っていただきたく、ご執筆をお願いしたところ、快くお引き受けくださり、玉稿をお寄せいただきました。【　　】は編者による注記です。

生い立ち―大東亜戦争の中で

昭和九年、東京は本所区厩橋で片岡電気商会の長女として誕生。幼少の記憶は、消毒の匂いに包まれたベッドと白いシーツの病室がほとんどの病弱な子であった。

毎夕、見舞いに来る父が読んでくれる本が唯一の楽しみで、なかでも何度もせがんだのが小川未明の『赤い蝋燭と人魚』であった。

昭和十六年、某私立校に入学予定だったが、直前にまた入院。少し遅れて近くの公立校―この年から名称が変更された明徳国民学校（注1）へ。

十二月八日、真珠湾奇襲攻撃による大東亜戦争へ突入するが、その一年前、紀元二千六百年を祝う祭典で、十一月十日から十四日までは提灯行列で街中が沸いた。私の誕生日はその中日（なかび）に当たり、「今年の稔坊のお誕生日は国中でお祝いされているみたい」と、母を喜ばせたが、開戦論者の陸相、東条内閣の出現で、日本の歴史は一変する。

後年学んだ事だが、東条内閣成立を知った東久邇宮は「東条は日米開戦論者である。このことは陛下も木戸内大臣も知っているのに（中略）組閣の大命が降下したことに失望し国家の前途に不安を感じる」と記した（『皇族の戦争日記』）。その不安は適中するのだが、真珠湾の戦勝に沸く国民には届かなかった。

〝欲しがりません勝つまでは〟〝贅沢は敵だ〟の掛け声の下、食糧・衣料等の配給制度、防火訓練のバケツリレーや各戸のガラス戸には、新聞紙で作った紙テープが貼られ、台所の床下には防空壕が造られ、日に日に戦時下の空気が色濃くなった。通学路には強制立退きで家屋を取り壊された空地が目立つようになり、国防婦人会の人たちが、千人針（注2）の布を持って道往く人に声をかけていた。寅年の伯母は「あたしは大変よ」と言いながら喜々として応じていた。虎は千里行って千里帰る縁起の良い動物で、一人一針の千人針の赤い玉を、寅年の人は自分の年齢の数だけ作れたのだった。

大東亜共栄圏建設の為の聖戦の波は、子どもにも容赦なく襲いかかって来た。

学童疎開令が発布され、四年生以上の児童は、集団疎開・縁故疎開に二分され親元を離された。私は縁故疎開組で母の郷里の茨城へ。

「戦争が終わったら昭南島（シンガポール）に別荘を建てて迎えに行くから、それまでの辛抱だよ」

常磐線の寿司詰めの車内での父の言葉が、唯一の支えであった。

歴史は、あの戦争を「太平洋戦争」「第二次世界大戦」と称するが、私の中では「大東亜戦争」以外の何物でもない。貧しいアジアの人々を助ける為の聖戦。少国民として叩き込まれた戦争の残像は、今も消えることはない。疎開先で伯母に起こされて見た深夜の、地平の闇に浮かぶ紅の一角、筑波嶺までがくっきり見えた。風が強く頭上で樫の枝が大きくゆれていた三月十日未明、私の故郷は焼滅した。

二日後の夕方、焼け焦げた衣服を纏った両親が現われた。母に背負われた妹の防空頭巾には無数の焦げ跡があり、真っ黒な顔に目だけが光っていた。

母屋の物置で親子四人の生活が始まった。農機具の詰まった奥の四畳程の莚敷きの場所、窓もない荒壁に囲まれた住い。夜はリンゴ箱の上に置いた豆ランプの細い明かりだけ。荒壁の穴から差し込む月光の方が明るかった。東京から追われて半年足らずで終戦。父はどんな想いでこの日を迎えたのか。ラジオの前で項垂れる大人たちの中で、一人毅然と宙を睨む姿が印象的であった。

一年後、父は狂死した。

父の死が自死であったら私は父を軽蔑したろう。狂死は出口のない絶望の中で、妻子を案じ、苦悩し、愛した末の終着。八月二十一日。享年五十。狂死は父の勲章―と今も思う。

思春期―恩師との出会い

母は強かった！と言うより泣いている暇など無かったのだろう。農繁期の日傭取り、屈強な出稼ぎの人々（注3）の中で、都会暮らしの母の慣れない農作業はどれ程きつかったか。それでも「トジョウ（屋号）の叔母」と呼ばれる母は周囲の支えに懸命に応えた。我が家は赤貧の母子家庭だったが苦にならなかった。私は今でも貧乏と貧困は違うと思っている。農閑期になると母は勧められて行商を始めた。背負い篭に日用品や佃煮など入れて村々を売り歩く。雨の日は商いに行けず、明日の米に事欠く日々であった思春期を、心豊かに過ごせたのは中学【太田村立太田中学校】で出会った先生のお陰。三年間Ａ組担任だった助川正平先生。私の人生の師。私だけではない、Ａ組の生徒にとって父なる人であった。

「稔惠さん、弁当忘れたか……うちの奥さんの弁当はうまいぞ」と、弁当箱の蓋に分けて私の前に置いてくれる。

「先生、本当は不味くて全部食えねんだべ」

「バレたか」

茶々を入れる男子も含め、クラス全体が家族、先生を中心とした家族だった。

私に作家になれと勧めたのも助川先生。私が自分を見失なわず、真っ直ぐ歩いて来られた大恩人。事あるごとに

「大丈夫。片岡稔惠なら出来る」と。

「あっ、先生の魔法の四字熟語だ」と奮起した。

一番の思い出は、三年生の時の演劇。先生に勧められるまゝに書いた脚本『異国の丘』。しかも主演・演出助手のおまけ付き。この劇が稲敷郡の代表になり水戸まで行った。

中学卒業は先生との別れでもある。

見ればただ　何の苦もなき　水鳥の　足にひまなき　我が思ひかな

作者は不明だが、この歌は助川先生が私に下さったお守りだと思った。生きていく指針としての。

進学を勧める母の願いを一蹴した。これ以上母に負担はかけさせられない。早く働きたかった。母に楽をさせたかった。それ以上に父を今戸（浅草）の墓に埋葬したかった。

葬式は寝棺で黒塗りの宮型霊柩車―しか知らない私は、早桶という粗末な座棺に足を折って入れられ、土葬された父を、何としても骨壺に納め菩提寺に帰してあげたかった。進学など頭にない私が思いついたのが、土浦一高を受験することだった。私の学力では絶対無理。だから受ける。落ちるのは親の責任ではないから。そんな浅知恵が先生の耳に入り、通信教育を―となった。志があっても進学出来ない貧農の家の子は多く、まして長男は「百姓に学問はいんねえ」の家長の一言で諦める男子や、「学校さ行ぐなら裁縫でも習え」と言われる女子が大半で進学は数人。六・三制が施行された時、「一年も余計に学校さ行ぐ

のが」（注4）と嘆く親もいた時代。その中で母が私の進学を切望したのは、施療病院を建て私を医者にという、父の望みを知っていたからだろ。

近隣には、江戸崎・竜ケ崎一高・二高と三校あるが、昭和二十二年に施行された通信教育を実施していたのは最も遠地の土浦一高であった。

土浦一高はまさに威風堂々これぞ学びの殿堂との感があり足が竦んだ。同行した級友たちも息を呑んで見上げていた。

「よく空襲に遭わなかったなあ」

誰かの声に我れに返った。近くには霞ヶ浦の航空隊基地がある。「……今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にゃ、でっかい希望の雲が湧くー」。白いマフラーの少年航空兵に憧れた男子は多い。

「ンだな、土中（現・土浦一高）は外人が設計した洒落た学校だって言うべ」。（注5）

太田村立太田国民学校本校舎（右）

太田国民学校の教職員と高等科女子生徒（昭和21年4月頃）。前から3列目・左から2番目が5年生時担任の助川（当時は新橋）光子先生、3番目が6年生時担任の菊池やい先生、最後列右端が助川正平先生。

私たち新制中学一期生は校舎がなく、卒業まで【太田村立太田】小学校の居候（注6）だった。裏山や寺の本堂が教室だったこともある。通信教育生ではあるが一高の門を入ることは誇らしかった。

余談だが、昔、三井不動産社長の江戸英雄氏と対談した折「……僕はね土中を受験したけど落ちて下妻中へ行ったんです。だから今でも土浦一高出身と聞くとえーっと思う」

「私、通教生ですから」

「だってあの校舎には入ったでしょう」

生まれ変わったら一高生になろうと笑って別れた。

『通教生』という機関誌に私の作文が掲載され、先生はじめ事務の人たちまで喜んでくれた。レポートの提出は愉しかったが、鹿島参宮鉄道【現・関東鉄道】のバスの車掌になった私には、慣れない乗務と、寮生活での勉強は無理だった。同僚の睡眠を妨げないよう、電気スタンドの笠の上に置く濡れタオルに湯気が立ち、乾く頃に朝が来る。冬はこのタオルで手を温めた。徹夜は平気だが、運行表（ダイヤ）に左右される勤務ではスクーリングも欠席がちで、学業は断念した。

転機―作家への道

七年間の車掌生活の一番の思い出は、労組の一員として、広島の平和記念式典へ参加したこと。前日平和公園でのリハーサル中に倒れ、救急車で運ばれた病院で急性虫垂炎と診断され翌朝手術。執刀の寸前サイレンが鳴り、医師と看護婦さんが一斉に黙祷。広島市内では八月六日原爆投下の八時十五分、サイレンを合図に交通も人も全て止まり黙祷をすることを後で知った。退院後、原爆ドーム、平和記念資料館などを見学し、帰郷した私に思いがけない転機が訪れる。『婦人生活』の懸賞小説に応募し、次点になり、これが縁でルポなど書くようになった。原田常治社長にはずい分目をかけて頂いた。その社長に言われた事がある。

「婦人雑誌の愛読者の学歴は高卒が主。『婦人公論』は大卒が主。うちに書く時は難しい書き方は避けた方が良い。平明な文が一番……」と。

当時、婦人雑誌といえば、『婦人倶楽部』・『主婦と生活』・『主婦の友』・『婦人生活』が競っていた。原田社長が別格と言った『婦人公論』の女流新人賞を受賞したのは、上京一年目。その時の選考委員の一人が平林たい子先生。何故か娘のように可愛がられ、沼袋のお宅へ頻繁にお邪魔した。

「あの怖い先生の所へ、よく平気で行けること……」と、知り合いの編集者に驚かれたほどだ。お邪魔するどころか、長女の名付け親にもなって下さった。自ら、病気のデパートと仰る先生を、私は傷だらけの観音様と称した。

老いゆきて、今

気付けば後期高齢者。充実した歳月だった。いつも誰かが支えてくれ、守って下さった。政界入りを勧められた社会党の浅沼委員長。評論家の村上信彦先生は、私の受賞作「チャージ」が、東武鉄道労組に叩かれた時、新聞紙上で擁護して下さり、以来親交を深めたが、浅沼委員長を刺殺した山口少年の伯父という巡り合わせもあった。

全国に先駆け、中国残留邦人の帰国促進運動を始めた千葉県で、「訪中団」の一員となったのが縁でその後、単独でソ満国境の街、中国黒竜江省方正県への取材を開始。その時同行して下さった李福徳先生は、博識で謙虚な知識人。娘ほど若い私を誠心誠意サポートして下さった。一九九〇年代の中国はまだ貧しく、ある時、「…年収は五千円」と言われ、月収の間違いではと、思わず聞き返した。残留婦人たちは涙ながらに望郷の念を語り、異口同音に言う。

「こうして日本人に会えるのは、田中【角栄】総理が国交回復をしてくれたお陰です」

「いつになるか判らないけど、本が出来たら皆さんの感謝を本と一緒に必ず伝えますから」と約束した。上梓した拙著（『残留・病死・不明』）を田中元総理に送った。日ならずして娘の眞紀子さんから電話。その後がすごかった。一年生議員の眞紀子さんが、いくら親の七光りがあるとはいえ、中国残留邦人帰国促進法案を成立させた。国策で送り出された開拓団の、敗戦で帰国の道を閉ざされた人々の絶望を救ってくれた田中眞紀子さんを、今一度政界にと切望しているのは、運動に関わった者たちだけではない。

ソ満国境の街に今はもう、残留者はいない。時は、辛さも悲しみも、思い出という温もりに変えてくれる。

昨秋、私の一番の理解者だった夫の十三回忌を済ませた。三人の子と孫にも恵まれた。

今年四月。助川先生が旅立たれた。

コロナ禍の中、先生と約束した弔辞は叶わなかったが、私の中には先生への墓碑銘がしっかり刻まれている。

我が人生の師　ここに眠る。

現在、七十歳から始めた水泳の、若い仲間と優しい先生方のご指導で心身共健康な日々を享受している。今日、作家の半藤一利氏の訃報に接し、僭越ながら、私も命ある限り、あの戦争を伝える筆を止めまいと誓った。

「昭和っ子」の歩みはまだ続く。

注1　明徳国民学校

1945（昭和20）年の東京大空襲で全焼し、1947年4月1日の国民学校の廃止に伴い廃校となった。

注2　千人針

白の晒木綿に「千人」の女性が赤糸で1針ずつ縫って、千個の結び目を作り、出征兵の腹巻にすると、弾丸よけになるとされた。

注3　屈強な出稼ぎの人々

田植え時などの農繁期には、鹿島地方から「鹿島女」と呼ばれる女性労働者たちが出稼ぎに来ていた。

注4　「一年も余計に学校さ行ぐのが」

六・三制以前は国民学校初等科6年、高等科2年であった。

注5　「ンだな、土中（現・土浦一高）は外人が設計した洒落た学校だって言うべ」

当時は、ドイツ人の設計とされていたが、1974（昭和49）年8月、建築史家一色史彦（高11回）が、設計者「県技師駒杵勤治」の名が記された棟札を玄関上の屋根裏から発見し、設計者は日本人であることが判明した。

注6　小学校の居候

1947（昭和22）年4月、茨城県下唯一の女性校長として太田村立太田小学校初代校長に35歳で就任した菊池やい先生は、『太田小学校百年誌』の中で、当時の学校の様子を次のように記している。

「……校名は太田国民学校から太田小学校に変わり、太田中学校が同時に生まれた。が校舎は無い。東一棟が中学、西二棟が小学校。長い戦争で瓦は落ちガラス窓は板張り、雨が降るとバケツ総動員。職員は皆同室、校長が一室に二人、朝の職員会議は同時、先生方は右の耳で中学校長の話を聞き、左の耳で小学校長の話を聞いて笑っていた。……」

（高21回　松井泰寿）